【2】原始仏教聖典（A 文献）の「摩訶迦葉」資料

［0］ここでは「原始仏教聖典」（A 文献）の摩訶迦葉資料を紹介する。上述したように、ここに摩訶迦葉「資料」というのは、摩訶迦葉の生涯やその活動内容・性格・人間関係など、摩訶迦葉の伝記を描くに当たって必要と考えられるエピソードや記事であって、単に名称が挙げられる場合や取るに足らない記述は含まない。紹介に当たっては記述の全体ではなく、摩訶迦葉に係わる部分のみを重点的に要約して示すようにした。

また原則として一つの文献に記述されたものは一つの「資料」として扱ったが、この中にさらに細かな「資料」が含まれることがある。このような場合は大きな見出し語とともに、小見出しを付けた。しかし一つの「資料」として扱うには大きすぎる場合には、いくつかに分割した場合もある。またエピソードとは関係なしに、摩訶迦葉の性格なり修行方法なりを表す「頭陀第一」というような言葉が使われている場合も、一つの資料と解して別立てにした場合もある。

これら資料の紹介の順序は機械的に聖典順とする。聖典の順序は本「モノグラフ」第１号に掲載した「『原始聖典資料による釈尊伝の研究』の目的と方法論」中の「本研究が主資料とする原始仏教聖典一覧」で整理した整理方針に基づく。すなわち *Dīgha-Nikāya*（以下 *DN.*と略する）、長阿含、*Majjhima-Nikāya*（*MN.*）、中阿含、*Saṃyutta-Nikāya*（*SN.*）、雑阿含、別訳雑阿含、*Aṅguttara-Nikāya*（*AN.*）、増一阿含、*Khuddaka-Nikāya* の *Dhammapada*、法句経など相応漢訳、*Udāna*、*Suttanipāta*、*Vinaya*、四分律、五分律、十誦律、僧祇律、そして単訳経の順序である。なお単訳経は大正新脩大蔵経の阿含部（第１巻と第２巻）に収載されているものである。この中には如来蔵系統の経とされる『央掘魔羅経』(1) やアヴァダーナと目される『給孤長者女得度因縁経』も含まれているが、ここでは一つ一つのテキストの検討を行わずに一応「阿含部」に収録されているものすべてを原始仏教聖典と見なした。しかしこれらを用いて摩訶迦葉研究の重要な材料とする場合は、必要に応じて検討を施すことになる。

ただしパーリ聖典と漢訳聖典が共通して伝える資料を第１次水準として尊重する本研究の資料観に則り、相応する資料に関しては、聖典の順序に拘わらずその直下に置いた。この場合の「相応」とは摩訶迦葉に関するエピソードが共通するという意味であって、文献上の対応関係ではない。

なおこれら相応する資料については、共通する番号を与えて整理し、どのようなエピソードを共通項として整理したかがわかるように小見出しをつけた。枝番号はこれら共通するエピソードを記す個々の文献ごとに付した。ただし上記の共通項は最も包摂的な内容を有する文献に含まれるものであって、小見出しとして掲げたすべての項目がそこに収めた文献資料のすべてに備わっているわけではない。最少の場合は複数掲げた項目中の一つのみが共通するという場合もありうることを諒解されたい。なお項目の人名・地名などはパーリ聖典を中心として示した。

また【5】以降にこれら資料を使って、整理分析を行うことになるが、これを行うに際しては資料のすべてに文献名と所在ページなどを示すと煩雑になるので、原則として資料番号のみを掲げることとしたい。ただし文献によって当該資料の信頼度は著しく異なるので、文

献名を記したほうがよいと判断される場合は、文献名だけを文字の大きさを落として付けることとする。

なおＡ文献に見いだされる資料番号は〈　〉で示し、Ｂ文献に見いだされる資料番号はその斜体の〈　〉で示す。

（1）高崎直道著『如来蔵思想の形成』（春秋社　昭和 49 年 3 月）p.191 以下参照

［1］以下に原始仏教聖典（Ａ文献）資料を紹介する。

《1》釈尊の葬儀（釈尊の入滅を知る・スバッダの暴言・火葬の薪に火がつく）

〈1-1〉摩訶迦葉はパーヴァー（Pāvā）からクシナーラー（Kusinārā）に至る道を 500 人の比丘とともに進んでいた。その時一人の邪命外道（aññatara ājīvaka）から今日より 7 日前に釈尊が入滅された（ajja sattāha-parinibbuto）ことを知った。これを聞いた比丘たちは嘆き悲しんだが、スバッダ（Subhadda）という比丘は「止めよ、友よ、悲しむなかれ、泣くなかれ。我らは彼の大沙門より脱した（sumuttā mayaṃ tena mahā-samaṇena）。これは許す（idaṃ vo kappati）、これは許さない（idaṃ vo na kappati）と苦しめられたが、これからは欲することをなし（yaṃ icchissāma taṃ karissāma）、欲しないことをなさないようにしよう（yaṃ na icchissāma taṃ na karissāma）」と。摩訶迦葉はすべてのものは滅びると、比丘たちを慰めた。

そのときマッラ族の首長（Malla-pāmokkha）が釈尊の遺体を荼毘に付そう（jhāpeti）としたが火がつかなかった。その理由を阿那律（Anuruddha）に聞くと、天たち（devatā）が摩訶迦葉が釈尊の足を礼拝するのを待っているのだと解説した。摩訶迦葉が城の東方にあったクシナーラーの天冠寺というマッラ族の廟（Kusinārā-Makuṭa Mallānaṃ cetiya）に着き釈尊の足を礼拝すると、薪は自然に燃え上がった。*DN*. 016（vol.Ⅱ p.162）

〈1-2〉釈尊が入滅されたので、遺体を城の北門を出て、熙連禅河を渡ったところにある天冠寺に安置して、末羅の大臣が火をつけようとしてもつかなかった。阿那律は「諸天が大迦葉を待っているのだ」と解説した。その時大迦葉は 500 人の弟子を引き連れて波婆国から拘尸城に来るところであった。そこで一人の尼乾子に会い、釈尊が滅度されてから 7 日経つと聞いた。比丘たちは嘆き悲しんだが、跋難陀という比丘が「汝等勿憂。世尊滅度我得自在。彼者常言。當應行是不應行是。自今已後隨我所爲」と言った。迦葉はこれを喜ばなかった。

迦葉が棺のところに行くと、釈尊の両足が出てきたので礼拝すると足が引っ込み、薪に自然に火がついた。『長阿含』「遊行経」（大正 01　p.027 中）

〈1-3〉鳩夷那褐王らは釈尊の遺体を鳩夷那竭城の西門を出て、周黎波檀殿の大講堂に運び、そこで荼毘に付そうとしたが火がつかなかった。阿那律は人々に「諸天が大迦葉を待っているのだ」と解説した。その時大迦葉は 1,000 人の比丘とともに鳩夷那竭城の方に来ようとしていた。途中で異学の優為と名づける者に会い、「滅度已來今爲七日」と聞いた。比丘たちは嘆き悲しんだが、一人の「年耆闇昧、不達聖意」比丘が、「世尊在時。法戒重沓。此非法也。彼非義矣。持此行是無違無犯。今世尊逝、吾等自由不亦快乎」と言った。

大迦葉は急いで仏所に至ると棺の中から仏の両足が出てきた。これを礼拝すると薪に自然に火がついた。『仏般泥洹経』（大正 01　p.173 下）

〈1-4〉漚蘇大臣らは釈尊の遺体を拘夷城の西の城門を出て漚荼地に運び、そこで荼毘に付そうとしたが火がつかなかった。阿那律は阿難に「諸天が大迦葉を待っているのだ」と解説した。その時大迦葉は 500 人の比丘とともに波旬から来るところで、そこで異道士の阿夷羅と名づける者と出会い、釈尊が「般泥曰已七日」と聞いた。比丘たちは嘆き悲しんだが、檀頭という比丘が「止諸比丘言。何爲復憂。我曹從今已得自在。彼老常言當應行是。不應行是。今彼長逝不甚往耶」と言った。迦葉はこれを喜ばなかった。

迦葉が遺体のところに到着すると、金棺から釈尊の両足が出てきたので、これを礼拝すると薪に自然に火がついた。『般泥洹経』（大正 01　p.189 中）

〈1-5〉諸力士たちは 7 日 7 夜釈尊の遺体を供養し、7 日を満じて金棺に納め、城の東門から出て宝冠支提の所に行って荼毘に付そうとしたが、火がつかなかった。阿兔樓駄が「尊者摩訶迦葉がこちらに来る途中なので如来は火がつかないようにされているのだ」と解説した。

そのとき摩訶迦葉は鐸叉那耆利國におり、釈尊が鳩尸那城で般涅槃を取られようとしていることを聞いて、500 人の比丘たちと来ようとしている途中で、一人の外道に会って「已般涅槃。得今七日」と聞いた。比丘たちは嘆き悲しんだが、晩暮に出家して愚癡無智なる比丘たちが「佛在世時禁呵我等不得縱意。既般涅槃何其快哉」と言っているのを聞いて、宝冠支提のところに急いだ。

その時如来は棺の中から両足を出されたので、礼拝すると自然に火がついた。『大般涅槃経』（大正 01　p.206 中）

〈1-6〉釈尊が入滅されたとき、一人のアージーヴィカ教徒がパーパー（Pāpā）に向かっていた。ちょうどそのとき、まだ手を付けられていない世尊の遺体を礼拝しようと願って（bhagavato śarīram avigopitaṃ vanditukāmaḥ）、500 人の比丘らを引き連れてパーパーからクシナガリー（Kuśinagarī）に向かっていた摩訶迦葉に会って、亡くなって 7 日たって（adya gate saptāhe vartate）今日火葬に付されるということを告げた。これを聞いて年老いた一人の比丘が「われわれはあの老いぼれから解放された。これをなさねばならぬ、これはなしてはならないと言っていたが、これからは何でも自由にしたいことをしよう」と喜んだが、比丘たちは悲しんだ。摩訶迦葉は一切のものは無常であると慰めた。クシナガリーのマッラ族の人々は釈尊の遺体を荼毘に付そうとしたが燃えなかったので、アニルッダ（Aniruddha）は阿難に天たちが摩訶迦葉が釈尊の遺体を礼拝するのを待っているのだと解説した。その時地上には 4 人の大長老（catvāro mahāsthavirā）がいた。アージュニャータ・カウンディニヤ（Ājñātakauṇḍinya）、マハー・チュンダ（Mahācunda）、ダシャバラ・カーシャパ（Daśabalakāśyapa）、摩訶迦葉（Mahākāśyapa）である。摩訶迦葉は「四依法」による生活によって知られていた。摩訶迦葉が礼拝すると自然に火がついた。*Mahāparinirvāṇasūtra*　p.420　＊この和訳は中村元著『遊行経　上・下』（大蔵出版　昭和 59 年 9 月、昭和 60 年 2 月）を参照させていただいた。以下 *Mahāparinirvāṇasūtra* を使用する場

合は同じ。

〈1-7〉釈尊が入滅されたとき、摩訶迦葉はパーヴァー（Pāvā）からクシナーラー（Kusinārā）に至る道を500人の比丘とともに進んでいた。その時一人の邪命外道（aññatara ājīvaka）から釈尊が今から7日前に入滅された（ajja sattāha-parinibbuto）ことを知った。これを聞いた比丘たちは嘆き悲しんだが、スバッダ（Subhadda）という比丘は「止めよ、友よ、悲しむなかれ、泣くなかれ。我らは彼の大沙門より全く脱れた（sumuttā mayaṃ tena mahā-samaṇena）。これは許す（idaṃ vo kappati）、これは許さない（idaṃ vo na kappati）と苦しめられたが、これからは欲することをなし（yaṃ icchissāma taṃ karissāma）、欲しないことをなさないようにしよう（yaṃ na icchissāma taṃ na karissāma）」と言った。摩訶迦葉はすべてのものは滅びると、比丘たちを慰めた。（以下第1結集記事が続く）
Vinaya「五百犍度」（vol.Ⅱ p.284）

〈1-8〉釈尊が拘尸城末羅園娑羅林間で般涅槃されたとき、末羅子が火をつけようとしても天がその火を消して荼毘に付すことができなかった。阿那律がそれは摩訶迦葉を待っているのだと解説した。

そのとき摩訶迦葉は波婆と拘尸城の中間にあり、500人の比丘と一緒であった。そして一人の尼揵から「般涅槃來已七日」と聞いた。比丘たちは嘆き悲しんだが、跋難陀釋子のみは「長老且止。莫大憂愁啼哭。我等於彼摩訶羅邊得解脱。彼在時數教我等。是應是不應。當作是不應作是。我等今者便得自任。欲作便作。欲不作便不作」と言った。摩訶迦葉たちは急いで拘尸城を出て醯蘭若河を渡ったところにある天觀寺に行った。そのとき棺が自然に開いて釈尊は足を現わされた。摩訶迦葉たちがそれを礼拝すると自然に火がついた。（以下第1結集記事が続く）　『四分律』「集法比丘五百人」（大正22　p.966上）

〈1-9〉釈尊が泥洹されて未だ久しからざるときであった。摩訶迦葉は毘舎離の彌猴水辺の重閣講堂に500人の僧と一緒であった。皆阿羅漢で阿難だけが違った。その時大迦葉は釈尊が入滅された時のことについて話した。「波旬国から拘夷城に向かう中間で釈尊がすでに般泥洹されたことを聞いた。比丘たちは嘆き悲しんだが、跋難陀が『彼長老常言。應行是不應行是。應學是不應學是。等於今始脱此苦。任意所爲無復拘礙。何爲相與而共啼哭』と言うのでますます悲しくなった」と。（以下第1結集記事が続く）　『五分律』「五百集法」（大正22　p.190中）

〈1-10〉釈尊が拘尸城の娑羅双樹の間で般涅槃され、諸力士が葬儀を執り行おうとしたときであった。その時摩訶迦葉は500人の比丘をつれて、波婆城から拘尸城に行こうとしてその中間にあった。そのときある梵志から「汝大師娑羅雙樹間力士住處般涅槃。今已七日」と聞いて、比丘たちは嘆き悲しんだ。しかし一人の愚癡不善不及の老比丘があって、「彼長老常言。應當行是不應行是。我今快得自在。所欲便作。不欲便止」と言うのを摩訶迦葉のみが聞いた。そのとき閻浮提で長老阿若憍陳如が第一上座で、長老均陀が第二上座、阿難の和上の長老十力迦葉が第三上座で、長老摩訶迦葉が第四上座であった。摩訶迦葉は多知廣識で四部衆は盡く皆な恭敬してその語を信受していた。摩訶迦葉は使いをやって釈尊の遺体を荼毘に付すことを止めさせ、頂結支夷に至っ

た。天は金棺を開いて釈尊の遺体を見せ、摩訶迦葉は敬礼した。その後諸力士は荼毘に付した。（以下第１結集記事が続く）　『十誦律』「五百比丘結集三蔵法品」（大正 23　p.445 下）

〈1-11〉釈尊は拘尸那城の熙連禅河の側らの力士生地の堅固林中双樹の間で般泥洹された。そこで天冠塔辺で闍維しようとしたが諸天は大迦葉を待つために火を燃えさせなかった。その時大迦葉は耆闍崛山の賓鉢羅山窟で坐禅をしていたが、釈尊が寿命を捨ててどこで般涅槃されようとしているのであろうか、今どこで、果たして安楽に住されているのだろうかと天眼をもって世界を観察し、すでに入滅されて闍維しようとしても火が燃えないことを知った。そこで遺体を敬礼しようとして、神通力を使うのはよくないからと徒歩で、多くの長老比丘とともに拘尸那竭に行った。そのとき拘尸那竭へ行く道の途中の一聚落に住んでいた一人の摩訶羅比丘が釈尊が亡くなったことを知って、「我今永得解脱。所以者何。彼阿羅訶在時常言。是應行是不應行。今已泥洹。應行不應行自在隨意」と言った。大迦葉が到着すると、釈尊は棺から両足を出された。大迦葉は礼拝して「我は世尊の長子である。私が闍維しよう」と言って、荼毘に付した。（以下第１結集記事が続く）　『僧祇律』「雑誦跋渠法」（大正 22　p.489 下）

《2》頭陀行を尊ぶ

〈2-1〉釈尊は牛角娑羅林（Gosiṅgasālavanadāya）に舎利弗・目連・摩訶迦葉・アヌルッダ・レーヴァタ・阿難らとともに住しておられた。彼らは夕方（sāyanhasamayaṃ）独坐より立って（paṭisallāṇā vuṭṭhito）舎利弗のところに行き、どのような比丘が牛角娑羅林を輝かすのかということについて話をした。阿難は多聞、レーヴァタは独坐、アヌルッダは天眼、迦葉は林住（āraññaka）・乞食（piṇḍapātika）・糞掃衣（paṃsukūlika）・三衣（tecīvarika）・小欲（appiccha）・知足（santuṭṭha）・五分法身、目連は法談、舎利弗は心の征服を讃めた。それを釈尊に報告すると、それぞれよく説いたと印可され、釈尊は心解脱を得るまで結跏趺坐を解かない者が輝かすと説かれた。（互いに‘āvuso’「友よ」と呼びあっている）　*MN*.032‘Mahāgosiṅga-s.’（vol. I　p.212）

〈2-2〉釈尊は跋耆瘦の牛角娑羅林に舎梨子・大目揵連・大迦葉・大迦旃延・阿那律陀・離越哆・阿難などとともに住しておられた。彼らは過夜平旦に舎梨子の所に行って、どのような比丘が牛角娑羅林を輝かすのかということについて話をした。阿難は多聞、離越哆は燕坐、阿那律陀は天眼、迦旃延は阿毘曇、大迦葉は小欲知足、目揵連は大如意足、舎梨子は心の自在を讃めた。これを釈尊に報告すると、皆よく説いたと印可され、釈尊は漏尽に至るまで結跏趺坐を解かない者が輝かすと説かれた。『中阿含』184「牛角娑羅林経」（大正 01　p.726 下）

〈2-3〉釈尊は跋耆国牛師子園に住しておられた。阿難は目連と迦葉と阿那律の三大声聞が連れだって舎利弗のところに行くのを見て、離越を誘ってついて行った。舎利弗は彼らに何が牛師子園を快楽にするかと質問した。阿難は説法、離越は坐禅、阿那律は天眼、迦葉は頭陀と五分法身、目連は神足と答えた。舎利弗は三昧に入って心を降伏することと説き、連れだって釈尊の説くところを聞きに行った。釈尊はそれぞれの所説を讃められ、有漏を尽して無漏を成じることだと説かれた。『増一阿含』037-003

（大正 02　p.710 下）

《3》摩訶迦葉のグループは頭陀説者

〈3-1〉釈尊は王舎城の耆闍崛山に住しておられた。その時釈尊は舎利弗のグループを大慧の者（mahāpaññā）、目連のグループを大神通の者（mahiddhika）、摩訶迦葉のグループを頭陀説の者（dhutavāda）、阿那律のグループを天眼者（dibbacakkhuka）、プンナのグループを説法者（dhammakathika）、ウパーリのグループを持律者（vinayadhara）、阿難のグループを多聞（bahussuta）、提婆達多のグループを有罪者（pāpiccha）として、それぞれ類が和合すると説かれた。*SN.* 014-015（vol.Ⅱ p.155）

〈3-2〉釈尊は王舎城迦蘭陀竹園に住しておられた。その時釈尊は憍陳如のグループは上座多聞大徳、大迦葉のグループは少欲知足頭陀苦行不畜遺餘、舎利弗のグループは大智辯才、大目揵連のグループは神通大力、阿那律陀のグループは天眼明徹、二十億耳のグループは勇猛精進、陀驃のグループは能爲大衆修供具者、優波離のグループは通達律行、富樓那のグループは辯才善説法者、迦旃延のグループは能分別諸經善説法相、阿難のグループは多聞總持、羅睺羅のグループは善持律行、提婆達多のグループは習衆惡行として、それぞれ類が和合すると説かれた。『雑阿含』447（大正 02　p.115 上）

〈3-3〉釈尊は舎衛国祇樹給孤独園に住しておられた。そのとき舎利弗のグループは皆智慧之士、目連のグループは皆是神足之士、迦葉のグループは皆是十一頭陀行法之人、阿那律のグループは皆天眼第一、離越のグループは皆是入定之士、迦旃延のグループは皆是分別義理之人、滿願子のグループは皆是説法之人、優波離のグループは皆是持禁律之人、須菩提のグループは皆是解空第一、羅云のグループは皆是戒具足士、阿難のグループは皆是多聞第一所受不忘、提婆達兜のグループは爲惡之首無有善本と説かれた。『増一阿含』049-003（大正 02　p.795 中）

《4》どのような衣食にも満足する者

〈4-1〉釈尊は舎衛城におられた。その時釈尊は次のように言われた。「この迦葉は自分が得たどのような衣にも、どのような鉢食にも、どのような床座にも、どのような薬・資具にも満足する者である。比丘らよ、これにならって励みなさい」と。*SN.* 016-001（vol.Ⅱ　p.194）

《5》舎利弗が熱心と愧について摩訶迦葉に質問する

〈5-1〉摩訶迦葉と舎利弗はバーラーナシーの仙人堕処・鹿野苑に住していた。舎利弗は摩訶迦葉を訪ねて、「なぜ不熱心と無愧は菩提・涅槃に達することはなく、熱心（ātāpin）と愧（ottāpin）は菩提・涅槃に達することを得るのか」と質問し、迦葉はこれに答えた。（互いに‘āvuso’「友よ」と呼びあっている）　*SN.* 016-002（vol.Ⅱ　p.195）

《6》在家に近づくに摩訶迦葉を模範とせよ

〈6-1〉釈尊は舎衛城におられた。釈尊は「比丘たちよ、迦葉は月のごとく（candupamā）身を整え心を調えて在家に近づく、在家においては新来の比丘のごとく謙虚なれ。摩訶迦葉を模範とせよ」と説かれた。*SN.* 016-003（vol.Ⅱ p.197）

〈6-2〉釈尊は王舎城迦蘭陀竹園におられた。釈尊は比丘らに「譬えば月光のように、柔和に、形を整えて他家に入るべきである。摩訶迦葉の心のように不著と不縛と不染の心で入るべきである。説法も摩訶迦葉のように、慈心と悲心と哀愍心で正法を久住させようとする心を以て、人の為に説法するように」と説かれた。『雑阿含』1136（大正 02　p.299 下）

〈6-3〉釈尊は王舎城迦蘭陀竹林におられた。釈尊は比丘らに「月が徐々に満ちていくように、そのように修行するように」と説かれ、この集会に集った比丘たちの中で、精進すること、繋縛を脱していること、清浄であることに於て、摩訶迦葉を大いに褒められた。『別訳雑阿含』111（大正 02　p.414 上）

〈6-4〉釈尊は王舎城迦蘭陀竹林精舎におられた。釈尊は比丘らに「月が円満に清らかなように、比丘も威儀を破らず、慚愧を具足して白衣の舎に入らなければならない。迦葉苾芻はよく清浄心を起こして衆生に説法し、仏の正法を久住せしめる。これを倣うべきである」と説かれた。『月喩経』（大正 02　p.544 中）

《7》乞食するに摩訶迦葉を模範とせよ

〈7-1〉釈尊は舎衛城におられた。釈尊は「迦葉は施しがあるように、多くの施しがあるようになどと考えることなく在家信者のところに行き、施されなくとも少しの施しでも苦しみも憂いも生じない。あなた方もそのように行じなさい」と説かれた。*SN.* 016-004（vol.Ⅱ p.200）

〈7-2〉釈尊は舎衛城祇樹給孤独園におられた。釈尊は「迦葉は施しがあるように、速やかに施しがあるようになどと考えずに在家信者のところに行き、施されなくとも緩やかでも屈辱しない。あなた方もそのように行じなさい」と説かれた。『雑阿含』1137（大正 02　p.300 上）

〈7-3〉釈尊は舎衛国祇樹給孤独園におられた。釈尊は「迦葉は施しがあるように、速やかに施しがあるようになどと考えずに在家信者のところに行き、施されなくとも緩やかでも嫌恨・愧恥しない。あなた方もそのように行じなさい」と説かれた。『別訳雑阿含』112（大正 02　p.414 下）

《8》釈尊は老年の迦葉に糞掃衣を捨てるよう勧める

〈8-1〉摩訶迦葉は王舎城の竹園に釈尊を訪ねた。釈尊は摩訶迦葉に言われた。「迦葉よ、汝は年老いた（jiṇṇo si tvaṃ）。糞掃衣は重いから家主の衣を着（gahapatāni cīvarāni dhārehi）、請ぜられたるを食し（nimantanāni bhuñjāhi）、我が傍に住せよ（mama santike viharāhi）」と。これに対して迦葉は「私は長い間、阿蘭若に住し、乞食をし、糞掃衣と三衣を着、少欲知足を讃嘆してきました」と答えた。釈尊は「汝は多くの人々の利益のために（bahujanahitāya）行じた」と糞掃衣・乞食・阿蘭若住を讃められた。*SN.* 016-005（vol.Ⅱ　p.202）

〈8-2〉摩訶迦葉は舎衛城東園鹿子母講堂での坐禅から覚め、祇樹給孤独園におられる釈尊を訪ねた。釈尊は摩訶迦葉に言われた。「汝今已老年耆根熟。糞掃衣重、我衣輕好。汝今可住僧中著土壞色輕衣」と。迦葉は「長夜習阿練若讃歎阿練若糞掃衣乞食」と答えた。釈尊は「汝則長夜多所饒益。安樂衆生哀愍世間。安樂天人」と頭陀行を讃められた。『雑阿含』1141（大正 02　p.301 下）

〈8-3〉摩訶迦葉は舎衛国旧園林毘舎佉講堂での禅定から起ち、祇樹給孤独園におられる釈尊を訪ねた。釈尊は摩訶迦葉に言われた。「汝今朽老、年既衰邁。著此商那糞掃納衣。垢膩厚重。汝今還可詣於僧中食於僧食。檀越施衣裁割壞色而以著之」と。迦葉は「私は長夜に納衣を着、阿練若行を行じ、乞食を行じてきました」と答えた。釈尊は「憐愍世間。利益弘多。爲作救濟。義利安樂」と頭陀行を讃められた。『別訳雑阿含』116（大正 02　p.416 中）

〈8-4〉摩訶迦葉は羅閲城の阿蘭若での禅定から起ち、迦蘭陀竹園の釈尊を訪ねた。釈尊は摩訶迦葉に言われた。「汝今年高長大志衰朽弊。汝今可捨乞食乃至諸頭陀行。亦可受諸長者請并受衣裳」と。迦葉は「我今不從如來教。もし如来が無上正真道を得ななかったならば私は辟支仏となって頭陀行を行じていたでしょう。今となって本所習を捨てられません」と答えた。釈尊は「善哉善哉。多所饒益度人無量廣及一切天人得度。この頭陀行が世にあれば、我が法もまた久しく世にあるであろう。諸々の比丘も迦葉のごとく修すべきである」と頭陀行を讃められた。『増一阿含』012-006（大正 02　p.570 上）

〈8-5〉その時釈尊は舎衛城祇樹給孤独園に住しておられた。釈尊は迦葉に言われた。「汝今年已朽邁無少壯之意。宜可受諸長者衣裳及其飲食」と。迦葉は未来の比丘が頭陀を捨てるようなことになるといけないからと辞退した。釈尊は「善哉善哉。迦葉は世の人のために福田となる。私が般涅槃して千歳余の後、比丘は頭陀行を行じなくなるであろう。私は今この法を迦葉と阿難に付嘱する」と讃められた。『増一阿含』041-005（大正 02　p.746 上）

《9》説法せよという釈尊の命を断る①

〈9-1〉摩訶迦葉は王舎城の竹林園におられる釈尊を訪ねた。釈尊は摩訶迦葉に「諸比丘を教誡し、法話をなせ、私かあるいは汝が教誡し、法話しなければならない（ovada Kassapa bhikkhū karohi Kassapa bhikkhūnaṃ dhammikathaṃ ahaṃ vā Kassapa bhikkhū ovadeyyaṃ tvaṃ vā ahaṃ vā bhikkhūnaṃ dhammikathaṃ kareyya tvam vā）」と言われた。摩訶迦葉は「今は説くに難しい状態です。阿難と共住のバンダ（Bhaṇḍa）比丘と阿那律と共住のアビンジカ（Abhiñjika）比丘のどちらが多く語り（ko bahutaraṃ bhāsissati）、どちらがよく語り（ko sundarataraṃ bhāsissati）、どちらが長く語ることができるか（ko cirataraṃ bhāsissati）を争っているところだからです」と答えた。釈尊は彼らを呼び集めてそれは出家者としてふさわしくないと説かれ、彼らは素直に懺悔した。釈尊はそれを讃められた。*SN.* 016-006（vol. II p.203）

〈9-2〉摩訶迦葉は舎衛城東園鹿子母講堂での坐禅から覚め、祇樹給孤独園におられる釈尊を訪ねた。釈尊は摩訶迦葉に「私は常に諸比丘のために説法・教誡している。汝もそのようになせ」と言われた。摩訶迦葉は「今世の比丘は教授し難い状態です。阿難の弟子の槃稠と摩訶目揵連の弟子の阿浮毘の二人は共にどちらが多く知り、どちらの知っていることが優れているか論議しようなどと言い争っているからです」と答えた。その時阿難は摩訶迦葉に「且止尊者摩訶迦葉。且忍尊者迦葉。此年少比丘少智惡智」と弁解した。摩訶迦葉は「汝且默然。莫令我於僧中問汝事」と阿難を黙らせた。釈尊

は彼らを呼び集めそれは仏の教えではないと説かれ、彼らは悔過した。釈尊はこれを讃められた。『雑阿含』1138（大正 02　p.300 中）

〈9-3〉摩訶迦葉は舎衛国旧園林毘舎佉講堂での禅定から起ち、祇樹給孤独園におられる釈尊を訪ねた。釈尊は摩訶迦葉に「私は常に諸比丘のために教授している。汝もそのようになせ」と言われた。摩訶迦葉は「今は難しい状態です。阿難の共行弟子の難荼と目連の弟子の阿毘浮の二人がどちらの知見が勝れ、どちらの説法が勝れているかと互いに言い争っているからです」と答えた。その時阿難は摩訶迦葉に「止止尊者。聴我懺悔。如此比丘新入佛法愚無智慧未有所解」と弁解した。摩訶迦葉は「爾止阿難。汝莫僧中作偏黨語」とたしなめた。釈尊は彼らを呼び集めそれは出家にふさわしくないと説かれ、彼らは懺悔した。釈尊はこれを讃められた。『別訳雑阿含』113（大正 02　p.415 上）

《10》説法せよという釈尊の命を断る②

〈10-1〉摩訶迦葉は王舎城の竹林園におられる釈尊を訪ねた。釈尊は摩訶迦葉に「諸比丘を教誡し、法話をなせ、私かあるいは汝が教誡し、法話しなければならない」と言われた。摩訶迦葉は「今は説くに難しい状態です。誰でも善法において信（saddhā）・慚（hiri）・愧（ottappa）・精進（viriya）・智慧（paññā）がなければ善法において増大することはありません。誰でも善法において信・慚・愧・精進があれば善法において増大して退失することはありません」と答えた。釈尊はこれをよしとされた。*SN.* 016-007（vol.Ⅱ p.205）

〈10-2〉摩訶迦葉は舎衛城東園鹿子母講堂での坐禅から覚め、祇樹給孤独園におられる釈尊を訪ねた。釈尊は摩訶迦葉に「私は常に諸比丘のために説法・教誡している。汝もそのようになせ」と言われた。摩訶迦葉は「今諸比丘難可爲説法。若説法者。當有比丘不忍不喜。若有比丘。於諸善法無信敬心……無精進慚愧智慧。聞説法者彼則退沒。……若有士夫。於諸善法。信心清淨……精進慚愧智慧。是則不退」と答えた。釈尊はこれをよしとされた。『雑阿含』1139（大正 02　p.300 下）

〈10-3〉摩訶迦葉は舎衛国旧園林毘舎佉講堂での禅定から起ち、祇樹給孤独園におられる釈尊を訪ねた。釈尊は摩訶迦葉に「私は常に諸比丘のために教授している。汝もそのようになせ」と言われた。摩訶迦葉は「是諸比丘。難可教授不能受語。若不信者退失善法……若復有人。具於信心。不退善法。……」と答えた。釈尊はこれをよしとされた。『別訳雑阿含』114（大正 02　p.415 中）

《11》説法せよという釈尊の命を断る③

〈11-1〉摩訶迦葉は王舎城竹林栗鼠養餌所におられる釈尊を訪ねた。釈尊は摩訶迦葉に「諸比丘を教誡し、法話をなせ、私かあるいは汝が教誡し、法話しなければならない」と言われた。摩訶迦葉は「今は説くに難しい状態です。彼らは教えを素直に受け取らないでしょう」と答えた。釈尊は「昔は阿蘭若住・乞食・糞掃衣・三衣・少欲知足を讃嘆する比丘がいたが、今はこれを讃嘆しない比丘や、著名となって衣・鉢・食を得たいと考えている年少比丘がいる」と説かれた。*SN.* 016-008（vol.Ⅱ p.208）

〈11-2〉摩訶迦葉は舎衛城東園鹿子母講堂での坐禅から覚め、祇樹給孤独園におられる釈尊を訪ねた。釈尊は摩訶迦葉に「私は常に諸比丘のために説法・教誡しているから汝

がなせ」と言われた。摩訶迦葉は「今諸比丘難可爲説法教誡教授。有諸比丘聞所説法。不忍不喜」と答え、「世尊是法根法眼法依。唯願世尊爲諸比丘説法。諸比丘聞已當受奉行」とお願いした。世尊は汝がために説くとして、「昔は阿練若住・乞食・糞掃衣・少欲知足を讃嘆する比丘がいたが、今はこれを讃嘆しない比丘や、財利・衣被・飲食・床臥・湯藥を得たいと考えている年少比丘がいる」と説かれた。『雑阿含』1140（大正 02　p.301 上）

〈11-3〉摩訶迦葉は舎衛国旧園林毘舎佉講堂での禅定から起ち、祇樹給孤独園におられる釈尊を訪ねた。釈尊は摩訶迦葉に「私は常に諸比丘のために教授している。汝もそのようになせ」と言われた。摩訶迦葉は「是諸比丘。不能受語。難可教授」と答え、「世尊是法根本。是法之導。法所依憑。善哉世尊。願爲敷演。我聞語已。至心受持」とお願いした。釈尊は汝がために説くとして、「昔は阿練若住・乞食・糞掃衣・少欲知足を讃嘆する比丘がいたが、今はこれを讃嘆しない比丘や、衣服・湯藥・床敷・敷臥具・四事豐饒を得たいと考えている新学比丘がいる」と話された。『別訳雑阿含』115（大正 02　p.415 下）

《12》半座を分かたれる（摩訶迦葉は釈尊と同じ禅定を得ている・半座を分かたれる）

〈12-1〉舎衛城に住しておられた釈尊は摩訶迦葉もまた（Kassapo pi）自分と同じく四禅・四無色定・想受滅と六神通を得ていると説かれた。*SN.* 016-009（vol.Ⅱ　p.210）

〈12-2〉優波崛は摩訶迦葉の塔を示して阿育王に言った。「これは摩訶迦葉の塔でまさに供養すべきです」。王は問うて言った。「彼にはどんな功徳があるのですか」。答えて言った。「彼は少欲知足で頭陀第一であり、如來は彼に半座と僧伽梨衣を施しました。そして衆生を愍念し正法を興立しました」と。『雑阿含』604（大正 02　p.168 上）

〈12-3〉摩訶迦葉は久しく舎衛国の阿練若処に住していたので「長鬚髪著弊納衣」で、祇樹給孤独園におられる釈尊のところにやって来た。それを見て比丘たちは摩訶迦葉を見て軽慢心を起こした。それを知った釈尊は半座を分かち「我今竟知。誰先出家。汝耶我耶」と言われた。そこで比丘たちは「奇哉尊者。彼尊者摩訶迦葉大徳大力。大師弟子」と驚いた。そのとき摩訶迦葉は「世尊。佛是我師。我是弟子」と言って辞退した。釈尊は「如是如是。我爲大師汝是弟子。汝今且坐隨其所安」と言われたので、摩訶迦葉は退いて一面に坐った。釈尊は比丘たちを警悟しようと、また摩訶迦葉がすでに殊勝広大の功徳を得ていることを衆に示すために、摩訶迦葉が自分と同じく四禅・四無色定と六神通を得ていると説かれた。『雑阿含』1142（大正 02　p.302 上）

〈12-4〉摩訶迦葉は舎衛国の辺遠処に草を敷いて住していたので「衣被弊壞。染色變脱。鬚髪亦長」して祇樹給孤独園の釈尊のところにやって来た。それを見て比丘たちは摩訶迦葉を見て軽慢心を起こした。それを知った釈尊は半座を分かち「我當思惟。汝先出家。我後出家。是故命汝。與爾分座摩訶迦葉」と言われた。摩訶迦葉は「世尊。是我大師。我是弟子。云何與師同共同坐」と辞退した。釈尊は「實如汝言。我是汝師。汝是弟子。即命迦葉。汝可於彼所應坐處。於中而坐」と命じられたので、迦葉は（自分の）座を敷いて坐った。釈尊は比丘たちが自ら呵責し、摩訶迦葉の功徳が仏と等しい（摩訶迦葉功徳尊重与仏斉）ことを知るために、摩訶迦葉は自分と同じく四禅・四

無色定と六神通を得ていると説かれた。『別訳雑阿含』117（大正 02　p.416 下）

〈12-5〉須摩提女が偈を以て次のように言った。

如來與半坐　最大迦葉是　『須摩提女経』（大正 02　p.841 上）

〈12-6〉大迦葉は大富の家の出であったが、出家修道して果證を獲た。この尊者は常に一處に止まり、常に一衣を持して少欲知足であり、佛は一時において半座を分けて坐らしめた。『給孤長者女得度因縁経』（大正 02　p.848 上）

《13》比丘尼に説法してトゥッラティッサー比丘尼に侮辱される

〈13-1〉舎衛国祇樹給孤独園に住していた摩訶迦葉は阿難に懇請されて比丘尼の住処に行き説法をした。その時トゥッラティッサー（Thullatissā）比丘尼は喜ばず「ヴィデーハの聖者である尊者阿難の面前で説法するのは、針商人が針師の許に針を売ろうとするようなものだ（seyyathāpi nāma sūcivānijako sūcikārassa santike sūcim vikketabbam maññeyya）」と悪言をはいた。そのとき「友、阿難よ（āvuso Ānanda）、われ針商人にして汝は針師なりや。……」「尊者迦葉よ（bhante Kassapa）、忍ぶべし。女人は愚かなるものなり」「友（āvuso）、阿難よ、待て（āgamehi）。サンガがことさらに汝を追及しないように（mā te saṃgho uttari-upaparikkhi）」という問答をしたのち、摩訶迦葉は阿難に対して、汝は世尊から九次第定と五神通を得ていると印可されたか、自分は印可されたと話した。そして「7 肘あるいは 7 肘半の象をターラ樹の一葉をもって覆い隠すことができると考えるような人は、私の六通を覆い隠すことができると考える」と言った。*SN.* 016-010（vol.Ⅱ p.214）

〈13-2〉摩訶迦葉と阿難は耆闍崛山に住していたが、王舎城で乞食の後、阿難に誘われて摩訶迦葉は比丘尼精舎に行き比丘尼のために説法した。そのとき偸羅難陀比丘尼は鞞提訶の牟尼である阿難の前で説法するのは「譬如販針兒於針師家賣」と非難した。阿難は「且止當忍此。愚癡老嫗。智慧薄少不曾修習故」と取りなした。摩訶迦葉は阿難に対して、汝は世尊が月譬をもって讃められたか、半座を分かたれたか、世尊と同じような功徳を有していることを印可されたかと獅子吼した。『雑阿含』1143（大正 02　p.302 中）

〈13-3〉摩訶迦葉と阿難は耆闍崛山に住していたが、王舎城で乞食の後、阿難に誘われて摩訶迦葉は比丘尼精舎に行き比丘尼のために説法した。そのとき偸羅難陀比丘尼は比提醯子の牟尼である阿難の前で説法するのは「如賣針人至針師門求欲賣針。終不可售」と非難した。阿難は「止止尊者。孼愚少智不足具責。唯願大徳、聽其懺悔」と取りなした。摩訶迦葉は阿難に対して、世尊が月譬をもって讃められたこと、世尊と同じように四禅・三明六通を有していることを印可されたことを獅子吼した。『別訳雑阿含』118（大正 02　p.417 上）

《14》摩訶迦葉の出家（阿難を童子のごとしと非難する・「もと外道」と非難される・自ら出家する・世尊は師私は弟子・糞掃衣を交換する・世尊の嗣子）

〈14-1〉阿難が南山（Dakkhiṇāgiri）に遊行したとき、約 30 人の同住比丘（saddhivihārin）は学を捨てて還俗し、ほとんどが童子となった（sikkhaṃ paccakkhāya hīnāyāvattā bhavanti yebhuyyena kumārabhūtā）。遊行から帰った阿難は王舎城竹林栗鼠養餌所にいる摩訶迦葉を訪ねた。摩訶迦葉は「なぜ行儀の伴わ

ない年少比丘とともに遊行するのか。友・阿難よ、あなたの年少の徒衆は破壊した（olujjati te parisā）、あなたの徒衆は壊滅した（palujjati te navappāyā）。この童子は量を知らない（na vāyaṃ kumārako mattam aññāsi）」と非難した。阿難は「頭に白髪が生えた者（sirasmiṃ phalitāni jātāni）を童子という言葉（kumārakavāda）をもって咎めるのですか」と反論した。これを聞いていたトゥッラナンダー（Thullanandā）比丘尼は「どうしてかつて外道であった（aññatitthiyapubba）摩訶迦葉はヴィデーハの聖者なる（vedehamuṇi）尊者阿難を童子という言葉をもって咎めるのか」と迦葉を非難した。そこで摩訶迦葉は阿難に次のように語った。

友よ（āvuso）、髪と鬚を剃り袈裟衣を纏い家より非家に出家して以来（yato ham āvuso kesamassum ohāretvā kāsāyāni vatthāni acchādetvā agārasmā anagāriyam pabbajito）、世尊・阿羅漢・正等覚者をおいて他の師を認めたことはない（nābhijānāmi aññaṃ satthāram uddisitum aññatra tena Bhagavatā arahatā sammāsambuddhena）。以前私は在家であったときに、在俗の生活は障害が多く塵のような道であるが、出家は屋外のようである（sambādho gharāvāso rajāpatho abbhokāso pabbajjā）、家に住していては（agāram ajjhāvasatā）一向に円満にして、一向に清浄なる梵行を行じるのに足かせになる（saṅkhalikhitaṃ brahmacariyaṃ carituṃ）、髪と鬚を剃り出家しよう、と考えた。そこで後に衣を裁断して重衣となし、世間に阿羅漢があるならば彼に従おうと（ye loke arahanto te uddissa）鬚髪を剃り、袈裟をつけて、家より非家に出家した（kesamassum ohāretvā kāsāyāni vatthāni acchādetvā agārasamā anagāriyam pabbaji）。

このように出家して道の半ばに達したとき、王舎城とナーランダーの中間にある多子廟に坐っておられる（antarā ca Rājagaham antarā ca Nāḷandaṃ Bahuputte cetiye nisinnaṃ）世尊を見て、「師と見なすなら世尊をこそ（師と）見なすべきである（satthāraṃ ca vatāhaṃ passeyyaṃ bhagavantam eva passeyyaṃ）。善逝と見なすなら世尊をこそ（善逝）とみなすべきである（sugataṃ ca vatāham passeyyaṃ bhagavantam eva passeyyaṃ）。正等覚者と見なすなら世尊をこそ（正等覚者）とみなすべきである（sammāsambuddhaṃ ca vatāham passeyyam bhagavantam eva passeyyaṃ）」と考えた。そこで世尊に「尊者よ、世尊は私の師です。私は弟子です（satthā me bhante bhagavā. sāvako ham asmi）」と申し上げた。そうすると釈尊は「迦葉よ、このように完全に心を具足している弟子に対して知らないで知ったと言う者や、見ないで見たと言う者はその頭が割れるであろう（yo kho Kassapa evaṃ sabbaṃ cetasā samannāgatam sāvakam ajānaññeva vadeyya jānāmīti. apasaññeva vadeyya passāmīti. muddhā pi tassa vipateyya）。私は迦葉よ、知って知ったと言い、見て見たと言う（aham kho pana Kassapa jānaññeva vadāmi jānāmīti. passaññeva vadāmi passamīti）」と言われた。そして慚と愧に住すること、善なる法を思惟し考え聞法すること、喜を伴う念を捨てることなどを学びなさい」と教誡して（ovādena ovaditvā）去っていかれた。

そうして第８日目に智を生じた（aṭṭhamiyā aññā udapādi）。その時釈尊がやって

こられたので、私は重衣を畳んで坐っていただいた。釈尊はこの布の重衣は柔らかい（mudukā kho tyāyam paṭapilotikānaṃ saṅghāṭī）とおっしゃったので、それを受けていただくと、釈尊は「自分の麻の捨てられた糞掃衣を着るか（dhāressasi pana me tvaṃ sāṇāni paṃsukūlāni nibbasanāni）」とおっしゃったのでそれを受けた。

もし世尊の子・嗣子であり、世尊の口から生まれ、法から生まれ、法の化生・法の相続者・世尊の着ておられた麻の糞掃衣を受けた者（yañhi taṃ sammāvadamāno vadeyya bhagavato putto oraso mukhato jāto dhammajo dhammanimmito dhammadāyādo patiggahitāni sānāni paṃsukūlāni nibbasanāni）があると言うならばそれが私だ。私は九次第定・五通を得ており、「7肘あるいは7肘半の象をターラ樹の一葉をもって覆い隠すことができると考える人は、私の六通を覆い隠すことができると考える」と言った。

トゥッラナンダー比丘尼は梵行から死没した（cavittha brahmacariyamhā）。*SN.* 016-011（vol.Ⅱ p.217）

〈14-2〉摩訶迦葉は王舎城耆闍崛山に住んでいた。釈尊が涅槃されて未だ久しからざるときのことである。そのとき阿難は行儀の伴わない年少比丘と一緒であったが、南天竺（南山国土）に遊行したときに30人の年少比丘が還俗して、「余多童子」となってしまった。遊行から王舎城に帰った阿難は、耆闍崛山にいる摩訶迦葉のところを訪ねた。摩訶迦葉は「如阿難汝徒衆消滅。汝是童子不知籌量」と非難した。阿難は「我以頭髮二色猶言童子」と反論した。低舎比丘尼がこれを聞いて「云何阿梨摩訶迦葉本外道聞而已童子呵責阿梨阿難。毘提訶牟尼令童子名流行」と言った。そこで迦葉は阿難に次のように語った。

私は自ら出家してから異師を知らない。唯だ如來應等正覺のみである。私はまだ出家していないとき、常に在家の生活は煩わしく、出家の生活は空閑で清らかであるからと、鬚髮を剃り、袈裟衣を着けて、正信に「若世間阿羅漢者聞從出家」と出家した。

出家し已って、王舎城と那羅聚落の中間の多子塔所において遇ま釈尊に値った。そこで「此是我師、此是世尊。此是羅漢、此是等正覺」と考えて仏に申し上げた。「是我大師。我是弟子」と。佛は私に言われた。「如是迦葉。我是汝師、汝是弟子。迦葉。汝今成就如是眞實淨心。所恭敬者。不知言知。不見言見。實非羅漢而言羅漢。非等正覺言等正覺者。應當自然身碎七分。迦葉。我今知故言知。見故言見。眞阿羅漢言阿羅漢。眞等正覺言等正覺……」と。

その時世尊は私のために、一心に聞法すべきこと、四念処に楽住すべきこと、常に慚愧に住すべきことなどを説かれて、去っていかれたので私も従った。そして世尊が坐られるとき私の僧伽梨に坐って頂いた。世尊は「迦葉。此衣輕細、此衣柔軟」と言われたので、私は「如是世尊。此衣輕細、此衣柔軟。唯願世尊受我此衣」と申し上げた。佛は「汝當受我糞掃衣。我當受汝僧伽梨」と言われ、「佛即自手授我糞掃納衣。我即奉佛僧伽梨」した。私は第九日に無學を得た。

摩訶迦葉は阿難に「若有正問。誰是世尊法子從佛口生從法化生付以法財諸禪解脱四昧正受。應答我是」と言い、例えば転輪聖王の第一長子が灌頂をもって即位すると、自然に王の五欲を受けることを得るように、仏の法子・仏口から生じた者・法化より

生じた者は禅解脱三昧を自然に得る。転輪聖王の宝象の高さ七八肘なるを一多羅葉をもって映障しようとする者は、摩訶迦葉の六神通智を映障しようとするようなものだと語った。『雑阿含』1144（大正 02　p.302 下）

〈14-3〉如来がまさに涅槃されようとしているときであった。摩訶迦葉は耆闍崛山にいた。阿難は行儀の伴わない新学の比丘をつれて南山聚落に遊行したが、30 余人が還俗してしまった。遊行から帰った阿難は王舎大城耆闍崛山にいる摩訶迦葉を訪ねた。摩訶迦葉は「汝於今者徒衆破壞。汝今無智猶如小兒」と非難した。阿難は「我已年邁。云何而言。猶如小兒」と反論した。帝舎難陀比丘尼はこれを聞いて「此大迦葉。本是外道。而今云何毀呰阿難比提醯牟尼作小兒行」と言った。そこで迦葉は阿難に次のように語った。

私は出家した時「世間若有阿羅漢者我當歸依」と誓った。そして自ら出家して以来、未だ異趣あることなく、唯だ如來無上至眞等正覺によるのみである。私は在家の時に世間は煩いが多く、出家は楽しいと考えていたので、鬚髮を剃り、法衣を着て「世間若有阿羅漢者。我當歸依。隨其出家」と出家した。

その時、王舎大城中間に羅羅健陀があり、その羅羅健陀の中間に多子塔があって、そこで世尊に会った。「我昔推求出世之師。今所見者。眞是我之婆伽婆阿羅呵三藐三佛陀也」と考え、世尊に「佛是我世尊。我是佛弟子」と三回申し上げた。佛もまた「如是迦葉。我是汝世尊。汝是我弟子」と三説された。そして仏は「世間若有聲聞弟子都無至心。實非世尊而言世尊。實非羅漢而言羅漢。非一切智言一切智。如是之人頭當破壞作於七分。我於今日。實是知者實是見者。實是羅漢而言羅漢。實等正覺言等正覺」と言われた。

世尊は善法を至心に受持すべきこと、四念処に住し、慚愧を増長すべきことなどを説かれた。そして仏の後にしたがい、仏が坐られるときに自分の僧伽梨に坐っていただいた。その時世尊は「此衣輕軟」とおっしゃったので、私は「實爾世尊。唯願世尊。憐愍我故當受此衣」と言った。佛は「汝能受我僃那納衣不」とおっしゃったので、私はそれを受けた。それから八日のうちに私は三果を得、第九日に阿羅漢を得た。

摩訶迦葉は阿難に言った。「當知。若有人能正實説者應當言。我是佛長子從佛口生從法化生、持佛法家、禪定解脱諸三昧門中出入無礙。譬如轉輪聖王所有長子未受王位五欲自恣。我於今者亦復如是。是佛長子、從佛口生、從法化生、持佛法家。禪定解脱諸三昧門出入無礙、如轉輪王所有象寶甚爲高大、持一多羅樹葉覆其身體欲令不現、可得爾耶……」と。『別訳雑阿含』119（大正 02　p.417 下）

〈14-4〉阿難は 500 人の比丘を連れて摩竭提国を遊行した。そのとき 60 人の年少弟子が還俗してしまった。王舎城に帰って訪れた阿難を見て、摩訶迦葉は「此衆欲失、汝年少不知足」と非難した。阿難は「大徳我頭白髪已現。云何於迦葉所猶不免年少耶」と反論した。この会話を聞いていた偸蘭難陀比丘尼は「摩訶迦葉是故外道、何故数罵阿難言是年少」と言い、翌朝にはつばを吐きかけた。『四分律』「比丘尼揵度」（大正 22　p.930 上）

《15》舎利弗が無記について摩訶迦葉に質問する

〈15-1〉摩訶迦葉と舎利弗はバーラーナシーの仙人堕処鹿野苑に住していた。ある夕方舎

利弗は摩訶迦葉を訪ねて、「友迦葉よ（āvuso Kassapa）、如来は死後に存在するか（kiṃ nu kho hoti tathāgato parammaraṇā）」と尋ねた。摩訶迦葉はこれに対して世尊は無記をもって答えられたと答えた。舎利弗はどうして無記であるのかと訊ねた。摩訶迦葉は「このことは利益にもならず（na hetam atthasañhitaṃ）、梵行のためにもならず（nādibrahmacāriyakaṃ）、……涅槃に到達するためにはならない（na nibbānāya saṃvattati）からだ」と答えた。*SN.* 016-012（vol.Ⅱ p.222）

〈15-2〉摩訶迦葉と舎利弗は耆闍崛山中に住していた。衆多の外道が舎利弗に如来の死後はあるのかと訊ねた。舎利弗は世尊は無記をもって説かれたと答えた。外道は「如愚如癡不善不辯。如嬰兒無自性智」と言って帰って行った。そこで舎利弗はその理由を摩訶迦葉に尋ねた。摩訶迦葉は「如来は色受想行識を尽し、心に善解脱されているからである」と答えた。『雑阿含』905（大正 02　p.226 上）

〈15-3〉舎利弗と摩訶迦葉は耆闍崛山に住していた。諸異見六師の徒黨が舎利弗に如来の死後はあるのかと訊ねた。舎利弗は世尊は無記をもって説かれたと答えた。外道は「是童蒙無智愚人」と言って帰って行った。そこで舎利弗はその理由を摩訶迦葉に訊ねた。摩訶迦葉は「如来は色受想行識を尽し、愛尽善解脱されているからである」と答えた。『別訳雑阿含』120（大正 02　p.419 上）

《16》釈尊が摩訶迦葉に正法と像法を説かれる

〈16-1〉摩訶迦葉が舎衛城祇樹給孤独園におられる釈尊を訪れ、「以前は学処（sikkhāpada）が少なくても多くの比丘が智を確立したのに、今は学処が多くても少しの比丘しか智を確立しないのは何故だろうか」と質問した。釈尊は正法（saddhamma）が滅しつつあるとき、学処多くして智を確立するものは少ない」として、正法と像法（saddhammapaṭirūpaka）について説かれた。 *SN.* 016-013（vol.Ⅱ　p.223）

〈16-2〉摩訶迦葉は舎衛城東園鹿子母講堂での坐禅から覚め、祇樹給孤独園におられる釈尊を訪ねて、「昔は制戒少なくして諸比丘は心から楽しんで学んでいたが、今は制戒が多く修学を楽しまないのは何故か」と質問した。釈尊は「五濁が生じて正法が滅して像法が起こるからだ。それには五因縁がある」と説かれた。『雑阿含』906（大正 02　p.226 中）

〈16-3〉摩訶迦葉は舎衛国旧＊園林毘舎佉講堂での禅定から起ち、祇樹給孤独園におられる釈尊を訪ねて「初めて戒を制されたときにはその数は少なく、しかも修行者は多かったが、今は戒が多いのに履行者が少ないのは何故か」と質問した。釈尊は「正法が滅して像法が生じるからだ。それには五因縁がある」と説かれた。『別訳雑阿含』121（大正 02　p.419 中）　＊大正は「西」とする。

《17》釈尊が摩訶迦葉の病気を見舞われる

〈17-1〉摩訶迦葉が王舎城のピッパリ窟（Pipphalīguhā）で病気に罹り苦しんでいたとき、釈尊が見舞われ七覚支を説かれた。彼はこれを聞いて病が癒えた。*SN.* 046-014（vol.Ⅴ p.079）

《18》頭陀行第一

〈18-1〉釈尊は私の声聞比丘の中で（etad aggaṃ mama sāvakānaṃ bhikkhūnaṃ）頭

陀を説く第一は（dhutavādānaṃ）摩訶迦葉である、と説かれた。*AN*.001-014-001（vol. I　p.023）

〈18-2〉釈尊は舎衛国祇樹給孤独園に住されていた。その時声聞中の第一を上げられる中で、十二頭陀行難得の行を行う者は大迦葉である、と説かれた。『増一阿含』004-002（大正 02　p.557 中）

〈18-3〉釈尊は舎衛国祇樹給孤独園におられた。そのとき阿那邠邸の娘の修摩提が満富城の満財長者の息子と結婚した。満財長者は外道異学の信者であったので、修摩提が信じる釈尊に会うことになった。釈尊は弟子たちに神足をもって一足先に行くように命じられた。弟子たちが行くと満財長者は一人ひとりこれがあなたの師かと質問した。大迦葉を見てこれが師かと質問したとき、修摩提は「頭陀行第一で、恒に貧窮なる者を憐れみ、如来が半座を与えた者の最大の大迦葉である」と説明した。『増一阿含』30-003（大正 02　p.663 中）

〈18-4〉釈尊は舎衛国祇樹給孤独園におられた。そのとき迦留陀夷にちなんで少欲を讃嘆されて、迦葉比丘の如く行ぜよ、その理由は迦葉比丘が頭陀十一法を行じるからであると説かれた。『増一阿含』049-007（大正 02　p.800 中）

〈18-5〉須摩提女は偈を以て次のように言った。

頭陀行第一　恒愍貧窮者　『須摩提女経』（大正 02　p.841 上）

〈18-6〉佛は、此人（迦葉）は頭陀行を修する中の最第一であると説かれた。『給孤長者女得度因縁経』（大正 02　p.848 上）

《19》貪欲などの十法を捨てよと説く

〈19-1〉摩訶迦葉は王舎城竹林迦蘭陀迦園に住していた。摩訶迦葉は比丘らに「貪欲などの十法（dasa dhammā）を捨てないで、法と律において増大することはない」と説いた。 *AN*. 010-009-086（vol. V　p.161）

《20》釈尊が頭陀行を讃められる

〈20-1〉釈尊は舎衛国祇樹給孤独園におられた。釈尊は比丘たちに「汝らが阿練若の者、乞食する者、独座する者、一坐一食の者、樹下に坐する者、露坐する者、空閑処の者、五納衣を着る者、三衣を持つ者、塚間に坐する者、一食の者、日の正中に食する者、頭陀行の者を誉めて讃えるならば、すなわち私を誉め讃えたことになる。もしこれらを毀つならば私を毀つことになる。何故ならば、私は常に自ら彼らを誉め讃えているからである。比丘らよ、これらを行ずる摩訶迦葉のように学ぶべきである」と説かれた。『増一阿含』012-005（大正 02　p.569 下）

《21》摩訶迦葉は婆羅門

〈21-1〉釈尊は羅閲城迦蘭陀竹園に住されていた。乞食のため王舎城に向われたが、その時一人の梵志の夫人が食事を婆羅門に供養しようとして、釈尊に「婆羅門を見かけませんでしたか」と話しかけた。釈尊は先を歩いていた摩訶迦葉を指さして「これはこれ婆羅門である」と言われた。夫人は黙って釈尊を見つめた。そこで釈尊は煩悩を尽した阿羅漢こそが婆羅門であると説かれた。そして釈尊は摩訶迦葉に行って法を説けと指示された。摩訶迦葉は彼女の舎に行って飲食を受け、教えを説いた。彼女は教えを聞いて法眼浄を得、優婆夷となった。彼女は夫にこのことを話したので、二人は一

緒に釈尊のもとへやって来て、「沙門は婆羅門なのか、沙門と婆羅門は異ならないのか」と質問した。釈尊は「欲言沙門者即我身是。所以然者。我即是沙門。諸有奉持沙門戒律我皆已得。如今欲論婆羅門者亦我身是。所以然者。我即是婆羅門也。諸過去婆羅門所持法行吾已悉知。欲論沙門者即大迦葉是。所以然者。諸有沙門律。迦葉比丘皆悉包攬。欲論婆羅門者亦是迦葉比丘。所以然者。諸有婆羅門奉持禁戒。迦葉比丘皆悉了知」と説かれた。夫も釈尊の教えを聞いて法眼浄を得、優婆塞となった。『増一阿含』018-004（大正 02　p.589 上）

《22》摩訶迦葉の紹介（姓は迦毘羅、名は比波羅耶檀那、婦の名は婆陀）

〈22-1〉羅閲城に富裕であるが慳貪で仏教を信じない跋提長者とその姉である難陀が住んでおり、門番に乞食の人を入れないように命じていた。そのとき四大声聞の大目犍連・摩訶迦葉・阿那律・賓頭盧は彼らに仏法僧を信ぜさせようとして、神通力を使って門内に入った。幻術を使うと驚いている長者に質多長者の妹であるその夫人が、摩訶迦葉について「此の羅閲城内に迦毘羅と名づける大梵志があり、饒財多寶にして数えきれないほどで、九百九十九頭の耕牛があって田作するのを知りませんか」と質問し、長者が「知っている、見たことがある」と答えると、「その息子を比波羅耶檀那と言い、身は金色で、その夫人は婆陀といい、女のなかで殊勝なる者で、紫磨金もその前にあっては黒が白に対するような、そんな玉女の寶を捨てて出家して阿羅漢を得、常に頭陀を行じていて、世尊が『我弟子中第一比丘頭陀行者は大迦葉である』と言われるほどで、先ほどやって来た比丘がこの比波羅耶檀那です」と紹介した。『増一阿含』028-001（大正 02　p.646 下）

《23》法を付嘱される

〈23-1〉釈尊は一切諸行は無常であるから般涅槃して千歳の後に威儀が衰えることもあるとされ、「吾今年老以向八十。然如來不久當取滅度。今持法寶付囑二人（迦葉と阿難）。善念誦持使不斷絶流布世間」と説かれた。『増一阿含』041-005（大正 02　p.746 下）

《24》入定して滅度を取らず

〈24-1〉釈尊は「迦葉比丘留住在世。彌勒佛出世然後取滅度」と説かれた。『増一阿含』041-005（大正 02　p.746 下）

〈24-2〉釈尊は弥勒仏について話をされた後、自分は年 80 余に向かい衰耗したが、大迦葉・君屠鉢漢・賓頭盧・羅云の四大聲聞は般涅槃するな、我が法の滅尽をもって般涅槃せよ、大迦葉は弥勒の世間に出現するまで摩竭國界の毘提村中の山中に住せ、弥勒如来が門を開くであろう、そして頭陀第一であったことを告げるであろう、なぜなら弥勒如来の会衆は釈迦文仏の弟子だからである、と説かれた。また我が法は千歳、弥勒如来の法は八万四千歳存するとも説かれた。『増一阿含』048-003（大正 02　p.787 下）

《25》迦葉は過去の諸仏の声聞より勝れる

〈25-1〉釈尊は舎衛国祇樹給孤独園におられた。釈尊は比丘たちに「①戒、②三昧、③智慧、④解脱、⑤解脱智見慧を成就し、⑥諸根が寂静し、⑦飲食に節度を保ち、⑧恒に共法を修行し、⑨その方便を知り、⑩その義を分別し、⑪利養に執着しなければ、長養に堪えられる」と説かれた。そのとき阿難が「どのようにすればよいのか」と質問

した。そこで釈尊は「①阿練若、②乞食、③一坐処、④一時食、⑤正中食、⑥家を撰ばず食し、⑦三衣を守り、⑧樹下に坐し、⑨閑静の処に露座し、⑩補納衣を著け、⑪塚間にいることである。これを完成させれば、阿那含や阿羅漢を得る。それ故に、迦葉比丘のように行ずるべきである。迦葉比丘はこの十一法を行じ、過去の仏もこの十一法を行じた。今の迦葉比丘は一切衆生を愍念する。もし過去の仏の声聞を供養すれば、後に報いを受けることができるであろう。もし迦葉を供養すれば現身にその報いを受けるであろう。もし私（釈尊）が無上正等正覚を成ずることができなかったとしても、後に迦葉によって正等覚を得るであろう。だから迦葉比丘は過去の諸々の声聞に勝るのである」と説かれた。『増一阿含』049-002（大正 02　p.795 上）

《26》摩訶迦葉の妻の物語

〈26-1〉婆陀比丘尼は過去の物語を自ら語った。そして今世は羅閲城中の劫毘羅婆羅門の女となり、比鉢羅摩納＝摩訶迦葉の婦となった。摩訶迦葉は先に出家し、自分は後日出家した、と語った。世尊は「我聲聞中第一弟子。自憶宿命無數世事。劫毘羅比丘尼是」と言われた。『増一阿含』052-002（大正 02　p.823 中）

《27》貧民街を乞食する

〈27-1〉摩訶迦葉はピッパリ窟（Pipphaliguhā）にとどまっていたときに病気に罹ったが、後に癒えた。その時 500 の天が食を得させようとしたが、摩訶迦葉はこれを断って王舎城の貧民街を乞食した。釈尊はこれを見られて「他の供養を受けず、了知し、自ら制し、核心に住し、煩悩を尽し、瞋恚を除いた者、そのようなものを私は婆羅門と呼ぶ（anaññaposiṃ aññātaṃ dantaṃ sāre patiṭṭhitaṃ khīṇāsavaṃ vantadosaṃ taṃ ahaṃ brūmi brāhmaṇaṃ）」というウダーナを唱えられた。*Udāna*　001-006（p.004）

〈27-2〉私はハンセン病患者（kuṭṭhin）の手から食物を受けた。彼が一握りの飯を鉢に投げ入れてくれるとき、彼の指もちぎれてそこに落ちた。私は嫌悪なく食した。*Theragāthā* vs.1054~1056（p.094）

《28》帝釈天が摩訶迦葉に供養する

〈28-1〉摩訶迦葉はピッパリ窟で 7 日間の禅定の後に、王舎城で托鉢をした。帝釈天が彼に食事の供養をしたあとで「最上の布施（dāna parama）を行った」とウダーナを唱えた。これを天耳を以て聞かれた釈尊も「常に乞食して、自ら養い、他の供養を受けることなく、寂静にして常に正念に住する比丘は、諸天も羨む（piṇḍapātikassa bhikkhuno attabharassa anaññaposino devā pihayanti tādino upasantassa sadā satīmato）」というウダーナを唱えられた。*Udāna* 003-007（p.029）

《29》摩訶迦葉の偈

〈29-1〉衆に尊敬されて遍歴すべきではない（na gaṇena purakkhato care）。……聖者は俗家に近づいてはならぬ（na kulāni upabbaje muni）。凡人は（他人から受ける）尊敬を捨てることは難しい。……*Theragāthā*　vs.1051~1053（p. 094）

〈29-2〉（戸口に）立って得たものを食（uttiṭṭhapiṇḍo āhāro）し、臭い尿を薬とし（pūtimuttaṃ osadhaṃ）、樹下を座臥処とし（senāsanaṃ rukkhamūlaṃ）、糞掃衣を着（paṃsukūlañ cīvaraṃ）、これだけで満足している人、彼こそは四方の人

（sa ve cātudiso naro）である。*Theragāthā* vs.1057（ p. 094 ）

〈29-3〉尊敬されるに値する舎利弗（pūjanāraha Sāriputta）が神々から尊敬されているのを見て、カッピナ（Kappina）は微笑んだ。*Theragāthā* vs.1086（ p. 096 ）

〈29-4〉私は頭陀の徳において勝れ（dhutaguṇe visiṭṭho 'haṃ）、大牟尼（釈尊）をおいて（ṭhapayitvā mahāmuniṃ）私に等しい者は存在しない（sadiso me na vijjati）。*Theragāthā* vs.1087（ p. 096 ）

《30》ブッダの相続者

〈30-1〉（摩訶迦葉の偈）そびえ立つ岩山に登ろうとして、生命を失う人々がいるのに、かのブッダの相続者（buddhassa dāyāda）であるカッサパは、気をつけながら心を落ち着け、岩山に登って、執着なく、おそれおののきを捨てて瞑想する。*Theragāthā* vs.1058（ p. 094）

〈30-2〉（目連の偈）静かな安楽の境地に達し、辺鄙なところを座臥処とする牟尼は、ブッダの最上の相続者（dāyāda buddhaseṭṭhassa）であって、梵天に敬礼される人である。婆羅門よ、静かな安楽の境地に達し、辺鄙なところを座臥処とする牟尼、ブッダの最上の相続者であるカッサパ（Kassapa）を敬礼せよ。由緒正しい婆羅門であって、3ヴェーダを読誦し、彼岸に達した者に敬礼しても、（カッサパに敬礼する）16 分の 1 にも値しない（ekaṃ kalaṃ n'agghati soḷasiṃ）。*Theragāthā* vs.1168～1171（ p. 105 ）

〈30-3〉（バッダー・カピラーニー比丘尼の偈）ブッダの子にして相続者であるカッサパ（putto buddhassa dāyāda Kassapa）は心の安定を得ている。牟尼（muni）は三明を得た婆羅門である（tevijjo hoti brāhmaṇo）。*Therīgāthā* vs.063～064（p.130 ）

《31》バッダー・カピラーニー比丘尼の偈

〈31-1〉（バッダー・カピラーニー比丘尼の偈）（摩訶迦葉と）同様にバッダー・カピラーニー（Bhaddā Kapilānī）も三明を得、最後の身を保っている（dhāreti antimaṃ dehaṃ）。世間に過患があるのを見て、私たち二人は出家して（ubho pabbajitā mayaṃ）漏を尽し、自制し、清涼となり、寂滅に達した（nibbuta）。*Therīgāthā* vs.065～066（p.130 ）

《32》「無主作房戒」（僧残 006）の制戒因縁

〈32-1〉そのときアーラヴィーの比丘たちは限度もなく多くの房舎を作ろうとしたので、人々は比丘を恐れ避けるようになった。そのとき摩訶迦葉は王舎城で雨安居を過ごしアーラヴィーに着いた。居士たちは摩訶迦葉を見て恐れ、あるいは道を避け、顔をそむけ、戸を閉じた。*Vinaya* 「僧残 006」（vol.Ⅲ p.144）

〈32-2〉釈尊が個人の房舎を作ってよいと許可されたので、曠野國の比丘たちは競って大房舎を作ろうとした。そこで人々は比丘を恐れ避けるようになった。そのとき摩訶迦葉は摩竭國から曠野城にやってきた。人々は比丘を避けていたので摩訶迦葉は誰にも会わなかった。『四分律』「僧残 006」（大正 22 p.584 上）

〈32-3〉阿荼髀邑の諸比丘は自ら房を作ろうとして人々に車や材料を求めた。そこで人々は逃げ回るようになった。その時大迦葉がやってきたが、人々は彼をも避けた。『五分律』「僧残 006」（大正 22 p.013 上）

〈32-4〉釈尊は阿羅毘國におられた。阿羅毘國の比丘たちは廣長高大舎を作ろうとした。そのとき乞食に城に入った大迦葉を人々は呵責した。『十誦律』「僧残 006」（大正 23　p.020 中）

《33》阿難との関係

〈33-1〉その時摩訶迦葉より具足戒を受けたいと願う者がいた。摩訶迦葉は阿難に「阿難よ、この人に具足戒の表白をせよ（imaṃ anussāvessati）」と言った。阿難は「私は長老の名を唱えることができません（nāhaṃ ussahāmi therassa nāmaṃ gahetuṃ）、長老は私の尊重するところですから（garu me thero）」と言った。釈尊にこの事を告げると、釈尊は「比丘らよ、姓をもって（gottena）具足戒の表白をすることを許す」と制せられた。*Vinaya* 「大犍度」（vol. I　p.092）

《34》2 人同時の授具足戒制定の因縁

〈34-1〉摩訶迦葉から具足戒を受けたいと願う者が 2 人いて、自分が先に受けたいと争った。釈尊は「一度に誦して 2 人に具足戒を授けることを許す」と制せられた。*Vinaya* 「大犍度」（vol. I　p.093）

《35》「不失衣界設定」制定の因縁

〈35-1〉摩訶迦葉はアンダカヴィンダ（Andhakavinda）から王舎城の布薩に参加する途中、河を渡り衣を濡らした。釈尊は「不失衣界を設けること」を許された。*Vinaya* 「布薩犍度」（vol. I　p.109）」

〈35-2〉大迦葉は僧迦梨を耆闍崛山に置いて上衣と下衣を着けて竹園に来ていた。雨が降ったので耆闍崛山に還れなかった。釈尊は一布薩共住処結不離衣羯磨の法を定められた。『十誦律』「尼薩耆 002・離三衣戒」（大正 23　p.031 中）

〈35-3〉大迦葉は耆闍崛山中に僧迦梨を置いて竹園に来ていたが、雨が降って帰れなくなった。そのため僧迦梨と別住となったので釈尊に伺った。釈尊は「不離衣宿羯磨を作すこと」を許された。『十誦律』「布薩法」（大正 23　p.158 中）

《36》疎に縫うことの許可の因縁

〈36-1〉摩訶迦葉の糞掃衣が重くなったので、釈尊に申し上げると「疎に縫うことを許す」等の衣の補修について制戒された。*Vinaya* 「衣犍度」（vol. I　p.297）

《37》第一結集を主宰する（結集の発議・結集・阿難の過失を告発する・プラーナ遅れて到着する・チャンナの梵壇）

〈37-1〉摩訶迦葉は釈尊が入滅されたときのスバッダ（Subhadda）という老年出家者の釈尊の教えを否定するような言葉を引き合いに出して、「非法が起こって法が衰え（pure adhammo dippati dhammo paṭibāhīyati）、非律が起こって律が衰え（avinayo dippati vinayo paṭibāhīyati）、非法説者が強く如法説者が弱く（pure adhammavādino balavanto honti dhammavādino dubbalā honti）、非律説者が強く如律説者が弱くなる（avinayavādino balavanto honti vinayavādino dubbalā honti）前に法と律を結集しよう（handa mayaṃ āvuso dhammañ ca vinayañ ca saṃgāyāma）」と提案して、サンガによって承認された。そこで 500 人の阿羅漢を集めて王舎城で雨安居に住して法と律の結集を行った。阿難はこの時まだ有学（sekha）であったが、集会のある前の晩に心解脱した。摩訶迦葉は優波離（Upāli）

に律を問い、阿難に法を問うた。阿難は釈尊が般涅槃されるときの、サンガが欲するならば「小小戒（khuddānukhuddakāni sikkhhāpadāni）」を捨ててもよいという言葉を紹介したが、「小小戒」に関する異論が出たので、摩訶迦葉は「未だ制せられないものは制せず、制せられたものは破棄せず、制に従い、制を持して行こう（saṃgho apaññattaṃ na paññāpeyya paññattaṃ na samucchindeyya yathāpaññattesu sikkhāpadesu samādāya vatteyya）」と提案して承認された。そして何を「小小戒」とするかを世尊に質問しなかったことなどの五罪についての責任を阿難に問い、阿難は必ずしも納得しなかったが、これを懺悔した。

そのときプラーナ（Purāṇa）は南山を遊行していて結集に参加していなかった。長老比丘たちがプラーナに「長老たちは法と律を結集した。この結集を受けよ（opehi taṃ saṃgītiṃ）」といったが、プラーナは「よく法と律を結集された、しかし私は世尊の現前に聞き、受けたことを奉じて行きます（susaṃgīt' āvuso therehi dhammo ca vinayo ca, api ca yath' eva mayā bhagavato sammukhā sutaṃ sammukhā paṭiggahitaṃ tath' evāhaṃ dhāressāmi）」と言った。

またその時、阿難は釈尊が般涅槃されるときに「チャンナ比丘（Channa）に梵壇（brahmadaṇḍa）を与えよ」と言われたことを紹介した。そこで摩訶迦葉は阿難に梵壇をなすことを命じた。チャンナは粗暴であるということで、比丘衆 500 人とコーサンビーに行った。チャンナは後悔し阿羅漢となったので梵壇は中止された。*Vinaya*「五百犍度」（vol.Ⅱ p.284）

〈37-2〉大迦葉は釈尊が入滅されたときの跋難陀の釈尊の教えを否定するような言葉を引き合いに出して、外道に「沙門瞿曇法律若煙。其世尊在時皆共學戒。而今滅後無學戒者」などと批判されないために、王舎城で法と毘尼を結集しようと提案して承認され、500 人の阿羅漢を選ぶことになった。大迦葉は阿難はまだ阿羅漢ではないという理由でその中に入れることに反対であったが、世尊の教えをもっともたくさん聞いているということで参加させることになった。そしてサンガの意志でまず毘舎離に赴いた。阿難はそこで心に無漏解脱を得た。

王舎城に到着して雨安居の準備をし、陀醯羅迦葉が上座、長老婆婆那が第 2 上座、大迦葉が第 3 上座、長老大周那が第 4 上座となり、大迦葉が僧事を知って白をなし、法と毘尼を論じることになった。そのとき阿難が「自今已去、爲諸比丘捨雑碎戒」という釈尊の言葉を紹介したので、「雑碎戒」とは何かという議論になった。しかし結論が出なかったので、大迦葉が「自今已去應共立制。若佛先所不制今不應制。佛先所制今不應却。應隨佛所制而學」と決裁した。そして大迦葉は阿難に 7 つの罪を懺悔することを求めた。結集は優波離に僧毘尼を問い、阿難に法毘尼を問い、雑蔵と阿毘曇蔵を集めて三蔵として終了した。

そのとき富羅那が到着して「我盡忍可此事。唯除八事」と言ったが、大迦葉の「是佛所不制不應制。是佛所制則不應却。如佛所制戒應隨順而學」という言葉で決択した。『四分律』「集法比丘五百人」（大正 22　p.966 下）

〈37-3〉大迦葉は跋難陀の仏の教えをないがしろにするような発言を聞いて、「佛雖泥洹比尼現在。應同勗勉共結集之。勿令跋難陀等別立眷屬以破正法」と考えて結集を提案

してサンガに承認された。諸比丘は阿難はもっとも世尊の教えを聞いているからと、そのメンバーに加えるべきことを提案したが、迦葉は阿難がまだ学地にあることをもって承知しなかった。その時阿難は毘舎離にあったが跋耆比丘らの教えによって解脱を得た。

結集は王舎城で雨安居に住して、阿難を加えて行われた。夏の初月に房舎・臥具を補治し、2月に諸禅解脱に遊戯し、3月に一処に集まった。そして優波離に毘尼の義を問い、阿難に修多羅の義を問うた。その後で阿難から「吾般泥洹後若欲除小小戒聽除」という釈尊の言葉が紹介された。大迦葉はなぜ「小小戒」の定義を確認しなかったかなどの6つの事項を叱責し、これについては迦葉が「沙門釋子其法如烟。師在之時所制皆行。般泥洹後不肯復學。迦葉復於僧中唱言。我等已集法竟。若佛所不制不應妄制若已制不得有違。如佛所教應謹學之」と決裁した。

このとき富欄那が南方からやって来て、内宿内熟自熟自持食從人受自取果食就池水受無淨人淨果除核食之の七条についての異論を提出し、これらは「不能行之」と言った。摩訶迦葉は「若佛所不制不應妄制。若已制不得有違。如佛所教應謹學之」と決裁した。

このとき拘舎弥に闡陀比丘があり不和合が生じていたので、迦葉は阿難と500人の比丘を梵壇法に処すべく派遣した。

結集の時には「長老阿若憍陳如爲第一上座。富蘭那爲第二上座。曇彌爲第三上座。陀婆迦葉爲第四上座。跋陀迦葉爲第五上座。大迦葉爲第六上座。優波離爲第七上座。阿那律爲第八上座」であった。『五分律』「五百集法」（大正22　p.190中）

〈37-4〉釈尊が入滅されたとき、一人の愚癡不善不及の老比丘が釈尊の教えをないがしろにするような発言をした。摩訶迦葉はその言葉を聞き、また法を非法と言い、非法を法と言い、善を不善と言い、不善を善というのを聞いて、王舎城において雨安居に住し、修妬路と毘尼と阿毘曇を結集することを提案してサンガに承認された。またこの時には阿難はまだ阿羅漢ではなかったけれども多聞第一であるから集法人に加えることを提案してこれも承認された。

結集は毘尼を優波離に問い、法と論を阿難に問い、若憍陳如・均陀・十力迦葉その他の500阿羅漢によって確認する形で進められた。これを終わったとき阿難が「我般涅槃後若僧一心和合、籌量放捨微細戒」という釈尊の言葉を披露したが、「一心和合」「微細戒」の意味を確認していなかったことがわかって、その他も含めて6つの突吉羅罪を悔過することが求められた。阿難は一々これに反駁したが、突吉羅罪として僧中で悔過した。そして迦葉が「我等盡當受持不應放捨」と決裁して結集を終えた。『十誦律』「五百比丘結集三蔵法品」（大正23　p.447上）

〈37-5〉釈尊が入滅されたとき、大迦葉は一人の摩訶羅比丘の釈尊の教えをないがしろにするような発言を聞いて、葬儀は在家信者に任せ我々は法蔵を結集すべきだと考えて、王舎城において結集することを提案し、サンガに承認された。阿那律は仏舎利を守り、阿難は供養するために入滅処に残ることを指示して、大迦葉は1,000人の比丘とともに王舎城に行き、刹帝山窟に世尊の座、その左面に舎利弗の座、右面に大目連の座、次いで大迦葉の座を敷き、4月安居の用意をした。そして結集に参加する500人の比

丘を選ぼうとした。阿那律が到着したので欠員は１人となった。そのとき尊者大迦葉は第１上座で、長老槃頭盧は第２上座、優波那頭盧は第３上座であった。彼らは後一人を補充しようとして、三十三天を含めて各地に使いを出した。しかし唎提那・憍梵波提・頗頭洗那・拔佉梨・欝多羅・大光・摩薮盧・羅杜らは釈尊が般涅槃されたことを知って自らも般涅槃してしまった。そこで阿難は世尊の侍者として親しく教えを受けたのだからと阿難を呼ぼうという意見が出されたが、大迦葉は「未だ学人で、師子の群の中に入れば疥瘙野干の如しだから」と拒否した。これを知った阿難は発奮して有漏を尽くしたのでメンバーの中に加えられた。

結集は阿難に法蔵を問い、優波離に毘尼蔵を問う形で進められた。途中優波離から阿難の女人の出家を許すために世尊に三請したことなどの７つの罪が告発され、阿難はそのうちの２つを除いて懺悔した。

この結果を外にいた 1,000 人の比丘に知らせると、釈尊は「欲爲諸比丘捨細微戒」と語られたというが何を捨てたのか、という質問が出たので、大迦葉は「未制者莫制。已制者我等當隨順學」と決裁した。『僧祇律』「雑誦跋渠法」（大正 22　p.490 上）

〈37-6〉分舎利がすんだ後、大迦葉・阿那律・迦旃延ら諸阿羅漢は阿難が仏にもっとも長く親しんだから、阿難の聞いた法・律の委曲を竹帛に載せようということになった。しかし在家信者たちが「恐有貪心隠蔵妙語不肯尽宣」と疑ったので、高座を設けて詰問したうえで、大迦葉と賢聖衆は羅漢 40 人を選んで阿難から四阿含を得た。一阿含 60 正素であった。この時阿難は７過を問われた。『仏般泥洹経』（大正 01　p.175 上）

〈37-7〉分舎利が終わった後、大迦葉・阿那律と衆比丘は共議して「仏十二部経有四阿含、独阿難侍仏久、仏之所説阿難志諷、当受書受」することになった。しかし阿難が「未得道、尚有貪心」の恐れがあるので、高座を設けて試問した後、大迦葉は四十応真を選んで、阿難より四阿含を得た。四阿含の文は各 60 正素であった。『般泥洹経』（大正 01　p.190 下）

〈37-8〉分舎利の後、迦葉は阿難・諸比丘とともに王舎城において三蔵を結集した。『大般涅槃経』（大正 01　p.207 下）

《38》「長衣戒」（『四分律』捨堕 001）の制戒因縁

〈38-1〉三衣を超える過剰の衣即ち長衣を蓄えることは禁じられているが、後に 10 日間に限り許されるようになった。阿難が長衣を得た時に布施したいと思ったが摩訶迦葉が不在であったので、10 日後に彼が戻るまで蓄えることを許されたことによる。『四分律』（大正 22　p.601 下）

《39》「長鉢戒」（『四分律』捨堕 021）の制戒因縁

〈39-1〉阿難が蘇摩国の高価な鉢を得たので、摩訶迦葉に与えようとしたが、彼はいなかった。そこで阿難は釈尊が「長鉢を蓄えてはならない」と制戒されているが、どうしたらよいものかと思案し、釈尊のもとを訪れた。このとき釈尊が「摩訶迦葉は幾日で帰るのか」と尋ねられたので、彼は「10 日後には帰る」と答えた。釈尊は比丘僧を集められ、比丘らに「10 日を限度に長鉢を蓄えてもよい。これを過ぎれば捨堕」と定められた。『四分律』（大正 22　p.621 下）

《40》「不受食戒」（『五分律』堕 037）の制戒因縁

〈40-1〉釈尊が未だ比丘に食を受けて食せよと制せられなかったので、比丘は各々の知り合いの家で不受なるものを食した。在家の人々はそれを見て不与取であると非難した。また摩訶迦葉は糞掃衣を着て道に捨てられたものを食べ、居士らから「犬のようだ」と譏られた。釈尊は摩訶迦葉にちなんで「棄去食を食すべからず。若し食すれば突吉羅」と制せられ、比丘らにちなんで「不受食を食すれば波逸提」と制せられた。『五分律』（大正 22　p.053 上）

《41》「謗廻衆利物戒」（『五分律』堕 080）の制戒因縁

〈41-1〉仏は舎衛城におられた。サンガに衣が得られたので、衆僧は摩訶迦葉に与えることにしたが、六群比丘が異議をとなえた。釈尊は此衣無欲衣として是とされたが、その後も不満を言うので「謗廻衆利物戒」を制定された。『五分律』（大正 22　p.068 下）

〈41-2〉仏は舎衛城におられた。陀瓢摩羅子が衣の分配役のとき舎那糞掃衣を得たので、諸比丘に諮り摩訶迦葉に与えることになった。六群比丘は羯磨が終わった後に異議をとなえた。釈尊は「若比丘僧応分物先和合聴与、後還遮者波夜提」と制せられた。『僧祇律』「単提 009」（大正 22　p.338 中）

《42》神通禁止制定の因縁

〈42-1〉四大声聞の迦葉・目連・阿那律・賓頭盧が相談して、王舎城の仏教を信楽しないで、かたく門を閉ざして乞食する者を入れない跋提長者とその姉を教化するために神通を示した。その時長者の夫人が摩訶迦葉を「畢波羅延摩納にして大姓の子であり、九百九十の田宅犂牛を捨てて出家し、あなたを哀愍するがゆえに乞食しに訪れたのだ」と解説した。釈尊は「従今不聴現神足、若現突吉羅」と制された。『五分律』「雑法」（大正 22　p.170 上）　＊〈22-1〉参照

《43》偸羅難陀比丘尼との関係

〈43-1〉釈尊は舎衛国におられた。偸羅難陀比丘尼の信者が四大弟子の大迦葉・舎利弗・目連・阿那律を食事に招いた。それを知った偸羅難陀比丘尼は「これらは小小比丘です。私に聞いて下されば大龍比丘をお招きできたのに。大龍比丘とは提婆達多の一派です」と言った。そこへ大迦葉が現れたので「大龍がきた」と言い換えた。そこで居士に非難された。『十誦律』「波夜提 030 食尼讃歎食戒」（大正 23　p.085 中）

〈43-2〉摩訶迦葉が耆闍崛山から王舎城に入って乞食をしているとき、偸羅難陀比丘尼が前方を歩いていた。摩訶迦葉が「妹よ、疾く行くか、道を避けてくれませんか」と言うと、偸羅難陀比丘尼は「汝もと外道よ、何を急ぐことがあるのか」と罵った。摩訶迦葉は「悪女、我不責汝、我責阿難」と言って、釈尊に申しあげた。釈尊は「今から比丘尼が前にありて行くことを許さず。若し前にあって行けば突吉羅」と制せられた。『十誦律』「雑法」（大正 23　p.291 上）

〈43-3〉摩訶迦葉が昼前に、霊鷲山から王舎城に入って乞食した。そのとき偸蘭難陀比丘尼が後からついて来て、肘で彼の背を隠した。彼は「汝を責めないが、阿難を責める」と言った。そして釈尊にこれを告げた。そこで釈尊は「今から比丘尼が比丘の背を隠してはならない。隠せば突吉羅」と制せられた。『十誦律』「雑法」（大正 23　p.291 下）

〈43-4〉雨のとき摩訶迦葉が昼前に王舎城に入って乞食した。偸蘭難陀比丘尼が後から付いて来て、彼を嗅いだ。彼は「汝を責めないが、阿難を責める」と言った。そして釈尊にこれを告げた。そこで釈尊は「今から比丘尼が比丘を嗅いではならない。嗅げば突吉羅」と制せられた。『十誦律』「雑法」（大正 23　p.292 下）

〈43-5〉摩訶迦葉が昼前に、耆闍崛山から王舎城に向って乞食した。ときに偸蘭難陀比丘尼が城門で出入りする男子の品定めをしていた。そこへ彼がやって来たので、彼女は「不吉だ。早起きして、もと外道の者を見るとは」と唾を吐き捨てた。彼は「汝を責めないが、阿難を責める」と言った。比丘尼らがこれを釈尊に告げると、釈尊は「今から比丘尼が比丘に唾を吐いてはならない。吐けば突吉羅」と制せられた。『十誦律』「雑法」（大正 23　p.294 下）

〈43-6〉釈尊は舎衛城におられた。長老迦留陀夷が乞食していると偸羅難陀比丘尼が後ろから来て、手で迦留陀夷に触れた。彼は蹴とばして「汝は摩訶迦葉に唾した。自分にもそうしようというのか」と言った。釈尊は「今から比丘尼は比丘に身に触れてはならない、摩触すれば罪を犯す」と制せられた。『十誦律』「雑法」（大正 23　p.295 上）

〈43-7〉釈尊は舎衛城におられた。そのとき摩訶迦葉が乞食のために一人の居士の家に入ると、居士婦が立って出迎えた。ところが偸羅難陀は先にその家にいたにもかかわらず、彼を見ても立って出迎えなかった。彼が食事の供養を受け終って立ち去ったのち、居士婦が彼女に「あの摩訶迦葉は釈尊の弟子で、天人の敬うところであるのに、どうして立って迎えなかったのか」と言った。すると彼女は「彼はもと外道婆羅門で、私の尊敬する対象ではない」と答えたので、居士婦は怒って「比丘を立って迎えないとは、外道の女性のようだ」と非難した。これを聞いた少欲知足の比丘尼が釈尊に報告した。釈尊は二部僧を集め、彼女を呵責されたのち、比丘らに「比丘尼が比丘の来るのを見て立たなければ、波逸提」と「不看同活尼病戒」を制せられた。『十誦律』「（比丘尼）波夜提 103」（大正 23　p.324 下）

〈43-8〉釈尊は舎衛城におられた。ある檀越が舎利弗・大目連・離波多・劫賓那・憍陳如等を食事に招いた。大迦葉は招きを受けなかったが、翌日この家の前を通りかかり招かれてこの家に入った。そこへ偸羅難陀比丘尼がやってきてその家の婦を見て、「あなたは今大象の群れのなかで大象を取らずして小象を取る。大鳥の群の中で孔雀を取らないで老鳥を取る。大象というのは闡陀・迦留陀夷・三文陀達多・摩醯沙滿多・馬師・滿宿及び侍者の大徳阿難だ」と言った。その時大迦葉がせき払いすると、「あなたは大いなる善利を得るでしょう。このような大龍象を招待したのですから。私ももし招待するならこれらの長老を招待します」と言った。『僧祇律』「単提 030」（大正 22　p.350 上）

〈43-9〉釈尊は舎衛城におられた。そのとき偸羅難陀比丘尼がある大家へ乞食に入った。するとその家の婦人が「堕胎した胎児を捨ててくれたら、施物を与える」と依頼した。彼女は一旦は断わったがその胎児を鉢に入れて、その場を立ち去った。そのとき摩訶迦葉は最初に乞食して得た食事を、他の比丘や比丘尼に与えていた。このとき彼はちょうど彼女と出会って食事を与えようとしたが、彼女は鉢を覆って受けようとはしなかっ

た。ところが彼には威風があったので、再度、彼女を呼び止めると、彼女は恐れおののいて鉢のなかを見せた。そこで彼が比丘尼らに告げ、比丘尼らが釈尊に報告した。釈尊は「今日より後、鉢を覆ってはならない」と、鉢事法を制定された。『僧祇律』「（比丘尼）雑誦跋渠法」（大正 22　p.547 上）

＊梵本は、Bhikṣuṇī-Prakīrṇaka 032［pātra-praticchādanā-pratisaṃyuktaṃ］（p.316）とある。

《44》「水中戯戒」（『十誦律』波夜提 064）制定の因縁

〈44-1〉釈尊は舎衛城におられた。波斯匿王が阿脂羅河で水浴して戯れている十七群比丘を見て、末利夫人に「あなたに尊重されている者たちがあのようなことをしている」と言った。夫人は「彼らは年少者です。摩訶迦葉・舎利弗・目連・阿那律を見てから言って下さい」と答えた。釈尊はこれを因縁として 水中戯戒を制定された。『十誦律』（大正 23　p.112 中）

《45》夏安居中の施衣の扱い

〈45-1〉大迦葉が波羅利弗城擁園にいるとき、摩竭提国の一住処に比丘が独りで住んでいた。夏安居中に施衣を得たがどう分配するのか分からず、大迦葉等上座の所へ伺いに行った。是の衣を受けるべしと答えた。『十誦律』「衣法」（大正 23　p.201 上）

《46》使浄人主制定の因縁

〈46-1〉瓶沙王は耆闍崛山上で泥を踏んでいる摩訶迦葉を見て作人を与える約束をした。しかしその約束を忘れていたので、その日数分の 500 人の作人を与え浄人村を作った。トラブルが生じたので、釈尊は「使浄人主を立ててよい 」と制された。 『十誦律』「臥具法」（大正 23　p.250 下）

《47》手巾拭制定の因縁

〈47-1〉摩訶迦葉が霊鷲山を上り下りするとき、眼に汗が入って眼を痛めた。釈尊は「手巾拭を蓄えてよい」と制せられた。『十誦律』「雑法」（大正 23　p.278 上）

《48》受具足戒の種類

〈48-1〉仏は王舎城におられた。諸比丘に十種の具足戒を明かされた。「何が十種であるか。（1）佛世尊の自然無師得具足戒と、（2）五比丘の得道即得具足戒と、（3）長老摩訶迦葉の自誓即得具足戒と、（4）蘇陀の隨順答佛論故得具足戒と、（5）邊地持律の第五得受具足戒と、（6）摩訶波闍波提比丘尼の受八重法即得具足戒と、（7）半迦尸尼の遣使得受具足戒と、（8）佛命の善來比丘得具足戒と、（9）歸命三寶已三唱我隨佛出家即得具足戒と、（10）白四羯磨得具足戒である。是を十種具足戒と名づく」とされ、摩訶迦葉は「自誓即得具足戒」であるとされた。『十誦律』「比丘誦」（大正　23　p.410 上）

〈48-2〉釈尊が成道して５年の間は比丘僧は悉く清淨であった。これより已後漸漸に非を爲すようになった。釈尊は事に隨って制戒を爲し立てて波羅提木叉・四種具足法を説かれた。自具足・善來具足・十衆具足・五衆具足である。（この文章の趣意は比丘たちに善来具足を許したために、不如法が生じたので十衆具足を説いたということであろう。そうすると十衆具足は成道５年以降に制定されたということになる）

自具足とは、世尊菩提樹下に在り、最後心に廓然大悟して、自覺妙證して善具足す。線經中に廣く説くが如し。是を自具足と名づく。

善來具足とは、佛王舍城迦蘭陀竹園に住したまう。佛諸比丘に告げたまわく。如來處處に人を度す。比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷なり。汝等も亦た當に如來にならいて（做。大正本文は効とする）廣く行きて人を度すべし（これは比丘らを諸国に二人して同じ道を行くなかれと布教に出したことを指すものと思われる）。爾の時諸比丘は世尊の教えを聞已りて諸國に遊行し、有信の善男子の出家を求める者を見る。諸比丘亦た如來にならいて「善來比丘」と喚び、人を度して出家せしむ。威儀進止・左右顧視・著衣持鉢皆な如法ならず。爲に世人に譏せ所る。（世人は）是の言を作す。「世尊所度の善來比丘は威儀進止・左右顧視・著衣持鉢皆な悉く如法なり。諸比丘の所度は亦た善來と名づくるも、威儀進止・左右顧視・著衣持鉢皆な如法ならず」と。爾の時尊者舍利弗是の語を聞き已りて、閑靜處に在りて跏趺して坐し、是の思惟を作す。「俱に是れ善來なるに、何故に世尊所度の善來比丘は皆な悉く如法にして、諸比丘所度の善來比丘は皆な如法ならざるや。云何ぞ諸比丘をして人を度するに善受具足にして、皆な悉く如法、共に戒を一にし、竟を一にし、住を一、食を一、學を一、説を一にならしめんや」と。舍利弗晡時に禪從り覺め已りて佛所に往詣して、頭面に禮足し、却きて一面に坐し、佛に白して言く。「世尊、我靜處に向い是の思惟を作す。「俱に善來と名づくるも、何故に世尊所度は皆な悉く如法にして、諸比丘の所度は皆な如法ならざるや。云何んぞ、諸比丘をして人を度するに善受具足にして皆な悉く如法、共に戒を一にし、竟を一にし、住を一、食を一、學を一、説を一にならしめんや。唯だ願くば世尊よ、具に爲に解説されんことを」と。佛舍利弗に告げたまわく、「如來所度の阿若憍陳如等五人は善來出家にして善受具足、共に戒を一にし、竟を一にし、住を一、食を一、學を一、説を一す。次に度す滿慈子等三十人、次に度す波羅奈城善勝子、次に度す優樓頻螺迦葉五百人、次に度す那提迦葉三百人、次に度す迦耶迦葉二百人、次に度す優波斯那等二百五十人、次に度す汝大目連各二百五十人、次に度す摩訶迦葉・闡陀・迦留陀夷・優波離、次に度す釋種子五百人、次に度す跋度帝五百人、次に度す群賊五百人、次に度す長者子善來、是の如き等は如來所度の善來比丘出家にして善受具足、共に戒を一にし、竟を一にし、住を一、食を一、學を一、説を一にす。舍利弗よ、諸比丘の度す可き所の人も亦善來出家善受具足と名づけ、乃至共に説を一にす」と。是を善來にして受具足と名づく。（ということで不如法が生じた弟子たちが与えた善来戒も具足戒を受けたこととして認定された）。十衆受具足とは……、五衆受具足とは……」とされ、摩訶迦葉は「善来出家善受具足」であるとされている。

『僧祇律』「雜誦跋渠法」（大正 22　p.412 中）

《49》大威徳ある摩訶迦葉

〈49-1〉釈尊は舍衛城におられた。難陀と優波難陀は比丘尼教誡の順番がなかなか回ってこないので、先に行きたいと思っていた。しかし「目連の時は　神通力があり他方世界に放り出される危険があるし、大迦葉は大威徳があり衆中で辱めを受けるかもしれない。舍利弗は柔和であるから」と思い、舍利弗の時に先に比丘尼精舍へ行って教誡した。釈尊は「若し比丘僧は差されないで比丘尼を教誡すれば波夜提」と制せられた。

『僧祇律』「単提 021」（大正 22　p.345 下）

《50》マートリカーを知る者

〈50-1〉この伝法の人においてまた三有り。故に聖語に稱して言う。知法と知律と知摩夷なり。知法とは善く修多羅藏を持するを謂う、阿難等の如し。知律とは善く毘尼藏を持するを謂う、優波離等の如し。知摩夷とは訓導宰任玄綱に於いて善なるを謂う、大迦葉等の如し。『羯磨』（大正 22　p.1064 上）

〈50-2〉此において傳法の人にまた三あり。故に聖誥に稱して言う。知法と知律と知摩夷なり。知法とは善く修多羅藏を持するを謂う。阿難等の如し。知律とは善く毘尼藏を持するを謂う。優波離等の如し。知摩夷とは善く訓導に於て玄綱を宰任するを謂う。大迦葉等の如し。『四分比丘尼羯磨法』（大正 22　p.1069 下）